
第3回 福祉のまちづくりモデル地区推進部会 議事録

平成19年6月28日 10:00～11:45 本庁2階第2会議室

出席者(敬称略): 三浦、長根、河合、宮部、國島、塩畑、徳永、小原、上迫田(代理:田熊)

関係団体職員:さいたま市社会福祉協議会 大橋 さいたま市社会福祉事業団 船戸

事務局:福祉総務課 高瀬、並木、井野

- 1 開会
- 2 あいさつ
- 3 議事等
 - 1) 一年目の課一年目の課題
 - 2) 仲本小における取組み
 - 3) その他(モデル地区推進事業の今後)
- 4 閉会

事務局 資料確認

資料1説明(省略)

<仲本小について対象児童が3年から4年生へと変更となり、より福祉の分野の取組みの課題がわかり、深く取り組んでいく>

田熊 前回の高砂小では4年生が行っていき、また同じ4年生では、皆様に見ていただくため、変わった学年が良いのだと思い、3年生を想定していた。3年生には「私の住みたい町」という学習目標があったため。しかし3年生の新担任と話したところ、「地域を探検して、浦和の町はこういうところが良いねで終わってしまい、福祉の段階まで目の心もまだ育っていないとの結論となった。そこで今年は4年生で行う方がよいこととなった。

4年生としては既に福祉に関しての授業を始めており、本来はこの部会で協議をした上で行いたかったが、明日はすでに「アイメイト」介助犬の方を招いて勉強することになっている。

これを皮切りに、7月末までになぜ福祉を学んでいくこととなったのか、障害をもつ人がどんな困難があるのか、バリアフリーとはどんなことなのかを学ぶ。その後、自分の目で耳で情報を集め始めている。これをもって夏休みを向かえ、いろんな場所に行き、また体験することで、親と一緒に話し合い感想を含めて、子供たちの体験の中で、課題を見つけ自分たちなりに集めて二学期を向かえることとなる。

9月では、模擬体験をやり、様々な障害の方たちの内容を体験し、その時にどんなことをしたら良いのかを考える、きっかけ作りとする。

その後、まちに出ることで情報をつかむ。学校から駅までグループに分かれて活動する。「目の不自由な人」「車椅子の人」と共に、まちを歩く、親や地域の人と「自分がもしこうなったらときはどうする」など訪ねながら歩きたい。

駅の周辺道路は完成しているのでしょうか、できていれば広い道となり、歩道、信号が設置され、車いすではどうなのか、幼児を連れた人、妊婦さんとしてはどうなのかという体験もしたい。母親や妊婦さんにも参加してほしい。

グループに分かれて、吸収、体験したことを9月までにまとめながら、10月中旬頃に発表としたい。たとえば、目の見えない人などには、信号が変わる時に音が出たほうがわかりやすい、などの気づきに重点をおいた方向にもって行きたい。

発表の中で、提案という形で、子供だけでなく、参加した方々にも一緒に話し合った内容について、発言をしてもらい、少し深めた発表会ができれば良いと考えている。

日程としては、11月7日が本校の国語の研究発表会となっており、できたらこの時期を避けてお願いしたいと思う。

その発表の後、最終的な目標は体験したこと、学んだことがどう生活に活かせば良いのかということである。経験ができることが、心の中に残り、自分のためになり、ひいてはこれを受け継いだ大人になり、浦和の為に、地域の為になる子供たちを育てていきたい。

それをどういった形で皆様に伝えていくか考えている。

宮部 以前にも知的障害者についての対象がはずれおり、高砂小と話をさせてもらったが、最後の子供たちのアンケートの中には、知的障害の人がいるのがわかった、やさしくしたとの感想をもらった。今回の仲本小の中には入っていないことについてどういう風に考えるか。

田熊 子供たちは生活の中でいろいろな子と一緒に過ごしており、理解していると思うが。

宮部 以前、育成会のほうで「知的障害とはこういうことである」と、神奈川の育成会でやっている取り組みを行った。子供たちにわかりやすく知的障害があることについて、ポケモンのピカチュウを例にとって、一つの言葉しか話さないことで、意味を知らない人は気分を害したり、笑ったりする事例で、

いつも知的障害者はこういう風に思われているとわかりやすく取り組んだものがあった。みんなが行うのは難しいが、できるのであればみんなに目に見える形での体験授業として取り組んでほしい。

田熊
河合

十分これからのことですから、検討の余地はある。

障害については知的、精神、聴覚、視覚、身体と様々な方がいることを理解して、幅広く知識を広げてもらいたい。特にパンフレットを作るときは注意してもらいたい。

別の問題としては、その地域の人を取り込んで一緒に考えるべきであり、地域との交流が少ないことがある。

このような取り組みをするときに、地域に開かれた学級として行ってもらいたい。

また、災害などの緊急時、障害者をどうするかということ地域で考えてもらいたい。是非そういったこと一緒に考える機会を考えてもらいたい。

田熊

地域の参加をグループとして考えていきたい、本校にも聴覚の方も何人もいますので考えていきたい。

三浦

カリキュラム内容は、夏休み前に4年生は3年の時のことを想起しながら、課題を与えて、夏休み中に親と子と一緒に取り組み考えてもらうことで、2学期の前半で疑似体験をし、後半にまち歩きに出てみる。当事者や父兄、地域の方など様々な人と一緒にグループ行動して10月に発表となるということによろしいでしょうか、その後、学校の生活の中に活かされていく、というこの流れについてはどうでしょうか。他の学年の障害を持った児童が、その時に一緒に参加するのはどうか。

田熊

他の学年と一緒に参加ができるのは、その日だけであればどうか検討はしていきたい。しかし、一人づつ担任がつくこととなるため人的には無理がある可能性がある。

宮部

親の立場としては、学習について参加する理由も内容も理解できるが、特定の個人をその目的だけで参加を促すとなると意味が違ってしまふ、その児童を含む同じクラス全てを参加させるべきである。

長根

弱視学級は何人か？

田熊

学級は現在一人。

長根

昨年のまち歩きでは、当協会の参加については3人となっていたが、今年は何名位か必要か。

田熊

まだ詳細が決まっていない、高砂小よりは2クラス少なく、体験、まち歩きは半日位を考えている。その中で児童が自分で設定した課題としての取り組みで決めていきたい。

<当事者との交流、ふれあいの時間をふやし、テーマは絞ることが必要>

船戸

昨年の高砂小ではまちの不便さ、こんなものなんだということ理解したうえ、実際にまちを歩いた時に障害を持っている方と一緒に行動し、生活の一部を聞き、障害を理解し認識を深めたりした。体験については何処でも同じであるが、もう一歩進んで、当事者の人と話をすることで効果があったと思う。

今回のまち歩きの場合、新旧混在しているところなので、ただ歩いててもテーマが絞りきれないと薄くなってしまう。

学校では障害を持っている児童がいるのだけれど、普段から見えない、そこでどういった生活をしているのかは児童も我々も見えてこない。

また、河合さんもおっしゃっていたけれど、地域の方が参加するので、地域の誰が何かあった時に助けてくれたり、何かしてくれる情報として人となりえるのかは、テーマとして投げかけたい。しかし、この中のどこで出来るかということがわからない。

高砂と同じことは9月まででできると思うが、もう少し当事者との交流を増やしたほうが良いと思う。また、昨年では児童と当事者が一緒まわることで、子供の発想で障害者用に作っていないながら、駐車場の発券機は車から降りなければ、操作ができないことについて発見したことがあり、大人が予想し得ない答えが出てきた。

今わかっているのが、仲本小には多くの障害児童が通ってくる、周辺は整備されたまちと静かなまちが有り、そこに地域商店会がどうかかわっていくかとなると、10月までには終わらない展開となる。発表の後にはもう一度、授業で行う必要があるのではないかと、9月までを整理しながら、その後を行うことを順序だててきめていくべきである。

今後、決めていくときに、あまり全部を盛り込むとだめになる、今年の内容はしぼっていくことで、もし終わらなかった場合は、次の学校へ受け継ぐようにすればいいと思う。

大橋

このモデル地区事業で、他の地域でもモデルとして取り入れることができることは、福祉についてどのように教えるかという指導方法ではなくして、どのように地域の人々を巻き込んで共に考えていったかという実践方法です。たとえば先ほどの「ピカチュウ」のような指導方法をそのまま持ってきて当てはめるのではなく、子供たちにどのような福祉観をどのように伝えていったらよいかから、そこに関わる大人たちで考えることで、大人たち自身も変わっていき、やがて地域も変わっていくのだと思う。

アイメイト使用者の講演は東部地区社協が関わっていると思うが、「福祉のまちづくり」の視点で見

- ると、注目すべきなのは授業の内容だけではなくて、むしろ福祉について学校だけで完結させず地域ぐるみで考えていっていることなのだと考える。
- 田熊 そのあたりについては、本校では地域の育成会と文化活動振興会がある。地域の方が子供たちの勉強や生活にかかわっていききたいとのことで、それぞれの代表の方が集まってくれて5年目となるが、毎年その人たちが総合学習の時間にかかわってくれており、本日も茶道体験を行っている。今回の件も、それぞれの会に既に協力をお願いしている。
- 河合 私が考えるには、住んでいる地域の人達が、障害者の人たちともっと理解し交流ができて、自分で考えて何ができるか考えていただく機会を設けてもらいたいということです。障害者であっても社会的に地域に貢献できる力を発揮できると思うのです。制度的や、物理的な面は改善されてきたが、地域の人々の考え方、受け入れ側がもう少し考慮をしてもらうようお願いしたい。
- 長根 昨年のように障害者と子供と一緒に話し合いながら駅に行き、駅であれば中までみられるような方向で調整をお願いしたい。特に券売機や生活として使うトイレなどは仕様が一つ一つ違っている。当事者が使う上においては苦勞をする、そういった点を感じて見てほしい。
- 三浦 船戸さんの指摘にあるように、疑似体験の時から疑問を聞いて校外の方に入ってもらおう。また、当事者の方と話合う時間をとって、様々なニーズを持った人が実際どうなんだろうと、一緒にまち歩きとなるどちらが先の方が、効果が上がるのか。特に公共トイレの仕様については、わかりやすいように水洗のボタンについてJISで決めていこうという動きもある。発表の後の気づきを活かすためにも、発表を多くの人に聞いてもらいたいと思う。丁度、発表の時と重なる時期に、新しい建物が駅に完成する、10月14日から25日までがプレオープン期間であり、その中の市民活動サポートセンターでは、応募によりイベントをする予定で、調整がつけば、初期の気づきの場をそこで行うこともできる。その後、学校へと持ち帰って話し合うことも可能であり是非使っていただきたい。少々決めていかなければならず、今後の日程を定めて、タイムスケジュールを決めるほうが良い。夏前までに、具体的な事項を決めて、発表については推進協議会にも声をかけながら、大勢に聞いてもらうほうが良いと思う。
- 田熊 プレオープン期間中で発表として、使用は可能か
- 三浦 オープンイベント中でも可能と思われる、候補は内覧期間内の10月15・16日あるいは18・19日の4日間の一日は可能であり、9Fフロア、10Fコミュニティセンターも一部を使いながら、広いスペースがあるので、地域の人を招くことも可能である。駅広場も暫定オープンでとりあえず使える状態であろうと思う。
- 田熊 プレオープンできる場所の良さもつけ加えたいので、中を見ることは可能か、
- 三浦 すでに建物は完成していると思うので、この時期は完成後の微調整を行っており、内覧期間が短く発表までのタイムスケジュールが難しいかと思う。
- 小原 建物の構造が見られれば、よさそうであるが、日程を決めてタイムスケジュールを決めるほうが良い。
- 田熊 昨年の当事者の参加はどのくらいであったか。
- 事務局 参加はまち歩きと発表の時に参加しており、高砂小では4クラスあり、各2回づつ3日間使いのべ21人位参加していた。
- 長根 当事者でまちの体験をした人が、話し合いに来て当時の様子を話していた。
- 船戸 疑似体験では遊びにならないようにコントロールする為、技術的に指導する目的で事業団、社会福祉協議会は参加している。その中で児童には内容をきちんと伝えて、疑問を抱かせ、当事者の人とはこんなところが大変なのだということをわからせる。ひとりひとり違うということがわかる。
- 田熊 校庭の水のみ場まで、児童がアイマスクをして付き添いとともに行くことは体験をしている。
- 船戸 疑似体験の時も当事者の方のコメントをいただければ、内容としては膨らむ。
- 田熊 今ところは、児童の気持ちを聞いておらず、話をしているのは「私の思い」なので、課題がどのようになるかにより、今後調整して当事者の人の参加については決めていきたい。また、まち歩き当日、雨であった場合の対応等はどうするか、予備日は設けるのか。
- 長根 少々雨であれば行ってもらいたい、荷物、つえの他、傘も持たなければならぬ状況を見てほしい。
- 三浦 いろいろとご意見をもらったが、本日、結論を出すのは難しいと思うが、今後の進展方法について、部会および上部の推進協議会で決めていく、交通整理や考え方があれば事務局からお願いしたい。
- 事務局 協議会を8月上旬頃に開催し、その時にある程度、方向性を決まったものを提出する予定としたい。2学期が始まる前に最終的に決める第4回の部会を開催したい。今後、決めることを煮詰める必要がある。
- 三浦 事務局と学校でカリキュラムを最終決定して、郊外からの招きの人数等を詰めて協議会へ諮ること

としてよろしいでしょうか。まち歩きについては、関連する所管が多岐に渡り、また交通バリアフリー関連の所管も違うため、この辺の連絡調整については、事務局に精力的に動いてほしい。是非、実りある体験をし、やってよかったと思えるようにしていきたいと思う。

3) その他：モデル地区推進事業の今後

<平成 20 年からのモデル地区推進事業の今後及び対象について>

事務局 議事 3) モデル地区推進事業の今後

資料 2 説明(省略)

- 三浦 事務局案としては、交通バリアフリーの重点地区の内、広めるということで大宮地区へと展開していきたいとのことで、候補として桜木小と大宮小の 2 校を挙げているがどうだろうか。
- 河合 大宮駅の西、東と比べるとあまりにも対照的過ぎる、新しいか古いかとなってしまう。
- 国島 さいたま新都心周辺は対象とならないか、交通バリアフリーの対象とはなっていないのか、さいたまの中心の位置づけとなっているが、周辺にも小学校はある。
- 船戸 新都心はハード面ではイメージしやすいが、ソフト面が弱い、まちづくりという点でまちが出来ていない、まち歩きをすればハードが出来ている感想で終わってしまう。まちの中に商店会が無く、地域の人とのつながりが希薄である。モデル地区の考え方からすると見えてこない。
- 田熊 そう考えると、大宮小がいいのではないかと、古くから地域とのつながりがある。大宮小の生徒は 6 年生が週一回駅までを清掃活動するなど、地域との連携は取れている。
- 徳永 駅東口の再開発計画については、どうなっているのか前から、計画はあったと思うが。
- 三浦 進展がなかったもので、一度仕切りなおしをし、再度また話し合いからはじまっている状況だと思う。
- 小原 このモデル地区推進事業は、これからのまちづくりについて考えていこうという事業なのだから、西口より、この東口のほうに重点を置いていったほうがいい。
- 三浦 まちとしての再開発が、今後ありえる場所ですから子供達からのやさしい視線でのまちづくりについての指摘をしていくことで、大人たちへの刺激が与えられる効果があると思う。
- 船戸 河合さんのご指摘のとおり、対照的過ぎる状況であり、西口は新しいまちが急にできて、桜木小は立ち退きを経験し、そういった中で、現在はどういうことで地域とつながっているのかが興味がある。西・東それぞれ違うテーマがあるので両方面白い場所である。特にこれからまちづくりができる大宮小を先行してやって、その後、開発したらこうなったという桜木小を行うといいと思う。
- 三浦 社会福祉協議会での福祉教育の実績からみてどうだろうか。
- 大橋 桜木小にはかかわっていないが、大宮小は、まち歩きをしながらバリアフリーマップを作成した実績がある。
- 小原 まちづくりについては、地域との協働でしていかなければいけないと考えており、他の地区もこういった事業に参加していくべきである。育成会からもこのモデル地区の推進については、次の大宮地区周辺の関係者に事前に話をしておくようにしたい。
- 三浦 それでは、継続性として、今回の仲本小の取り組みについてが、今後も活かされればよいと考えますので、大宮小学校に優先的に声をかけていただき、学校での受け止め方もあることでしょうから、その状況により、学校が前向きに是非と言うことであれば推し進めていくということによろしいでしょうか。

4 閉会

<今後の予定>

事務局

8 月上旬あたりの推進協議会に今回の件も含め諮りながら方針を決めていく。
次回の第 4 回モデル地区推進部会については、2 学期授業が始まる前の 8 月中と考えている。